

天文学とプラネタリウム

第126回



今月のお題

見ることから始まる科学



オランダの博物館で目にした近代科学成立の歴史。自然をつぶさに見ることから科学は始まる、そんな強いメッセージが伝わる展示でした。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

六本木で星のソムリエ®講座始めました

この夏、オランダの町ライデンを訪問する機会がありました。訪問の目的はライデン大学で天文教育活動を活発に展開しているペドロ・ルツソ氏との意見交換でしたが、ライデン大学と密接な協力関係にあるボルハーフェ博物館 (Museum Boerhaave) の見学やスタッフとの意見交換の機会もありました。この博物館の収蔵・展示物の中心は医学と自然科学に関するもので、コンパクトな施設のわりに大変見ごたえがありました。

そもそもオランダは、天文学の歴史を語るうえで欠かすことのできない著名な人物を多く輩出しています。土星の環を発見したホイヘンス、宇宙論で名高いド・ジッター、「オールトの雲」にその名を残すオールトなど。ボルハーフェ博物館にも、ホイヘンスが土星の環の発見を発表した本やホイヘンス自身が磨いたレンズ、お手製の振り子時計など多くのゆかりの品が展示されていました。またライデン大学天文台に備え付けられていたという木製の巨大な四分儀も圧巻。この四分儀は 1610 年 (ガリレオが望遠鏡で宇宙を見た翌年!) に作られたもので、解説

員の方曰く「ティコ・ブラーエが使っていた四分儀を作った技術者の弟子が作ったもので、最もティコのものに近縁な四分儀」だとか。「近代科学の礎となったものの実物がまさにそこに展示してある」というこの迫力は、やはりヨーロッパの博物館ならではのようです。和算をはじめ日本にも独自の学問はありましたが、現代の科学の直系のご先祖様が醸し出す雰囲気はやはり別格。

展示の中でもっとも力を入れたと解説員の方がおっしゃっていたのは、館に入ってすぐに設置された円形の部屋 "Anatomisch theater"。中央に小さなテーブルがあり、その周りを階段状の座席がぐるっと取り囲んでいます。これは 18 世紀の医学教室を再現したもので、中央のテーブルでは人体解剖が行われ、学生たちがそれを見学していたそう。博物館の部屋でも中央には真っ白な人体模型が置かれています。来館者はまずこの部屋に入るわけですが、ここではこの人体模型に、そして部屋全体にいろいろな映像が投影され (いわゆるプロジェクションマッピング)、人体から微生物、そして宇宙まで「科学は物事をつぶさに見ることから始まった」と



1610年に作られた大きな四分儀。学問の町ライデンの歴史を象徴する展示品の一つでした。

いうメッセージが投げかけられます。この先にたくさん展示してある科学を作り上げてきた道具や書籍がこうした「見る」という営みの中で生まれてきたものであるということ、そして現在私たちがその恩恵にあずかっている科学の世界そのものがそうしてできてきたものであること。これを強く印象付ける、博物館の最初の部屋にふさわしい素晴らしい演出でした。

天文学でも、見るのが基本。肉眼でも望遠鏡でも、真摯に宇宙と対話したい。業務が忙しくてなかなか研究ができていない自分を見つめる、良い機会でした。

126

126